

第6課 神を演じる

【暗唱聖句】

「その日には、人は言う。見よ、この方こそわたしたちの神。わたしたちは待ち望んでいた。この方がわたしたちを救ってくださる。この方こそわたしたちが待ち望んでいた主。その救いを祝って喜び躍ろう」イザヤ 25:9

【日曜日・諸国民の裁き】

イザヤ書 13 章～23 章には、イスラエルとかかわった諸国民に対する預言がまとめられており、最初はバビロンに対する裁きの預言から始まる。当時の脅威であったアッシリアの裁きについては、すでにイザヤ書 10 章で語られており、13 章からは後にアッシリアをも上回る最大の脅威となるバビロンについて語られていく。イザヤの時代には、バビロンはアッシリアに支配されており、後にイスラエルを脅かす大帝国となっていくとは想像できなかったことだろう。しかし神はそのことをご存じであり、ゆえにここでバビロンについて語られているのである。

【月曜日・大いなる都バビロンの滅び】

「バビロンは国々の中で最も麗しく、カルデア人の誇りであり栄光であったが、神がソドムとゴモラを覆されたときのようになる」(13:19) とあるが、この預言が実際に実現したのは、このときから約 200 年後の紀元前 539 年のことであり、ペルシャとメディアの連合軍によって滅ぼされる。その後二度とかつての栄光を取り戻すことはなかった。神は単に未来を預言しているだけでなく、すべての歴史の背後におられ導いているのが神であることを教えている。またバビロンが滅びたことによって、ヤコブの子孫は捕囚から解放されることになることも、イザヤは預言している。

「まことに、主はヤコブを憐れみ再びイスラエルを選び、彼らの土地に置いてくださる」14:1

エルサレムの滅亡とバビロン捕囚、そしてバビロンからの帰還は、イザヤだけでなく、エゼキエルやエレミヤなど多くの預言者が語っている。それだけ重要な出来事であると共に、世の終わりに生きる者たちに対するメッセージでもある。近づく世の終わりとは再臨の預言は、さらに多く語られており、それは必ず成就するときが来るからである。

【火曜日・神の山から落ちた君主】

バビロンが滅びていく様は、「陰府に落ちた。蛆がお前の下に寝床となり、虫がお前を覆う」(14:11) とか、「亡霊たちを呼び覚ます」(14:9) など、恐ろしい描写がなされている。これは実際の光景ではなく、詩的な表現ではあるが、ぞっとする描写である。このような裁きに至る理由が述べられている。

「ああ、お前は天から落ちた。明けの明星、曙の子よ。お前は地に投げ落とされた。もろもろの国を倒した者よ。かつて、お前は心に思った。「わたしは天に上り、王座を神の星よりも高く据え、神々の集う北の果ての山に座し雲の頂に登って、いと高き者のようになろう」と。」イザヤ 14:12～14

バビロンはただ神によってユダの裁きのために用いられた道具にすぎなかった。しかし、高慢となり、すべて自分の力、自分の栄光だと思った。まるで、自分は神であるかのように錯覚した。このような高慢な思いに支配された途端、バビロンの王は獣のようになってしまったことがダニエル書に描かれている。そして、その息子も父のみじめな姿から学ぶことなく、同様に高慢な心に支配され、ついに神の裁きが下り、一瞬にして滅ぼされる。

【水曜日・天の門】

イザヤ 14:12～14 は、バビロンの王の高慢さと裁きを預言すると共に、悪魔・ルシファーが天から地に投げ落とされた場面をも表している。明けの明星のラテン語はルシファーである。ルシファーが神のようになろうと高慢

になり、反逆をおこした結果、天から地へと落とされたのである。このことは他の聖書箇所にも繰り返し登場する。

エゼキエル 28:14 「わたしはお前を翼を広げて覆うケルブとして造った。お前は神の聖なる山にいて火の石の間を歩いていた。28:15 お前が創造された日からお前の歩みは無垢であったが、ついに不正がお前の中に見いだされるようになった…お前の心は美しさのゆえに高慢となり、栄華のゆえに知恵を墮落させた。わたしはお前を地の上に投げ落とすとした」エゼキエル 28:14～17

「この巨大な竜、年を経た蛇、悪魔とかサタンとか呼ばれるもの、全人類を惑わす者は、投げ落とされた。地上に投げ落とされたのである。その使いたちも、もろともに投げ落とされた」黙示録 12:9

人間の尊大なふるまいは、悪魔と同じ精神を現わしている。サタンは人間を通して働くのである。このバビロンという言葉は、やがてローマを指すようになり、そして悪の勢力を指すようになり、神を神とも思わず、神のごとくに高慢に生き、神の民を迫害することも含めて神に反逆する者たちの世界の象徴となる。

バビロンという言葉は、アッカド語（バビロニア人の言葉）でバブ・イリ（神々の門）という言葉から来ているが、ヘブライ語のバベルにもとづいている。そして、バベルという言葉は、「混乱」を意味するバラルと語呂が似ていることからつけられた名前である。

ヤコブが天と地を結ぶ階段を夢で見たとき、「ここは天の門だ」と叫んだ。天への入り口が地上に降りてきたわけだが、神々の門という場合は逆に、人間が神に向かっていくものであった。バベルの塔もピラミッド型の神殿も、地上から天に向かって建てられた。このことは救いの問題とも関わってくる。つまり、神の恵みによって救いがもたらされるのか、それとも人間の行いによってもたらされるのかということである。自らの力で救いを得ようとするとき、そこに待っているのは「バベル・混乱」であり、バビロンは必ず倒れるのである。

【木曜日・シオンの勝利】

イザヤ書の特徴の一つは、時代を超えて壮大なスケールで預言が語られていることである。24章は黙示録 20章に描かれている千年期に関する出来事と似ている。

「その日が来れば、主が罰せられる。高い天では、天の軍勢を。大地の上では、大地の王たちを。彼らは捕虜が集められるように牢に集められ、獄に閉じ込められる。多くの日がたった後、彼らは罰せられる」24:21、22

「わたしはまた、一人の天使が、底なしの淵の鍵と大きな鎖とを手にして、天から降って来るのを見た。この天使は、悪魔でもサタンでもある、年を経たあの蛇、つまり竜を取り押さえ、千年の間縛っておき、底なしの淵に投げ入れ、鍵をかけ、その上に封印を施して、千年が終わるまで、もうそれ以上、諸国の民を惑わさないようにした。その後で、竜はしばらくの間、解放されるはずである…すると、天から火が下って来て、彼らを焼き尽くした。そして彼らを惑わした悪魔は、火と硫黄の池に投げ込まれた。そこにはあの獣と偽預言者がいる。そして、この者どもは昼も夜も世々限りなく責めさいなまれる」黙示録 20:1～10

この世界は善と悪との大争闘の中に巻き込まれている。それはバビロンの時代においても、現代においても同様である。そして善と悪との大争闘の決着は、初めから決まっている。ヨハネは見た決着のほうが、イザヤが見たそれよりも詳しく描かれているが、内容が同じであるのは当然のことなのである。神は悪を最終的には完全に滅ぼし、一掃される。エゼキエル 28:19 に、「お前は人々に恐怖を引き起こし、とこしえに消えうせる。」とあるように、この宇宙から悪が完全に消滅する。そして、この宇宙は神の愛だけが支配する世界に戻る。